

日本イェイツ協会

第 49 回大会

プログラム

2013

10月19日（土）～10月20日（日）

会場

広島市立大学

〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3丁目4番1号

TEL: 082-830-1500 FAX: 082-830-1656

日本イェイツ協会事務局

〒270-0198 千葉県流山市駒木474

江戸川大学メディアコミュニケーション学部

情報文化学科 海老澤研究室内

TEL : 04-7152-9923 FAX : 04-7153-5904

10月19日(土)

於 図書館・語学センター棟 4階 LL404 教室

9:30~10:00 受付

10:00~10:30 挨拶 (図書館・語学センター棟 LL404 教室)

日本イエイツ協会会長

小堀 隆司

広島市立大学長

青木 信之氏

アイルランド大使

John Neary 氏

司会

海老澤 邦江

10:30~11:30 【講演】(図書館・語学センター棟 LL404 教室)

「“Supernatural Songs”を読む」

藤本 黎時

司会

荒木 映子

11:30~12:00 【研究発表】(図書館・語学センター棟 LL404 教室)

1. 「自由国の芸術家をさいなむ不安—W. B. イェイツの *The Bounty of Sweden*」

諏訪 友亮

司会

萩原 眞一

12:00~13:20 昼食 (学生会館)

総会 (学生会館もしくは LL404 教室)

司会

木村 俊幸

13:20~14:20 【研究発表】(図書館・語学センター棟 LL404 教室)

2. 「螺旋階段とリフレイン: ‘Stare’s Nest by My Window’ の場合」

佐久間 思帆

3. 「イエイツの「歌う」行為と「書く」行為: イースター蜂起と「声によって結ばれた共同体」

西谷 茉莉子

司会

榎木 伸明

14:30~17:30 【シンポジウム】(図書館・語学センター棟 LL404 教室)

「イエイツと老い: 老いと創作の関わり」

司会・構成

伊達 直之

山崎 弘行

木原 誠

長谷川 弘基

18:00~19:30 情報交換会 (学生会館)

司会

池田 寛子

10月20日(日) 於

図書館・語学センター棟 4階 LL404 教室

10:00~10:30 受付

10:30~12:00 【研究発表】(図書館・語学センター棟 LL404 教室)

- | | |
|--|--------|
| 1. 「言わない名前：イエイツによるアンチ・ヒロイン像」 | 中村 麻衣子 |
| 2. 「イエイツの初期の抒情詩に見られるロマン主義」 | 橘川 寿子 |
| 3. 「Jennifer Johnston の <i>Two Moons</i> について」 | 吉田 文美 |
| 司会 | 木原 謙一 |

12:00~13:00 昼食 (学生会館)

13:00~15:30 【ワークショップ】 (図書館・語学センター棟 LL404 教室)

「イエイツ・老い・想像力/創造力—詩の源泉としての<老い>」

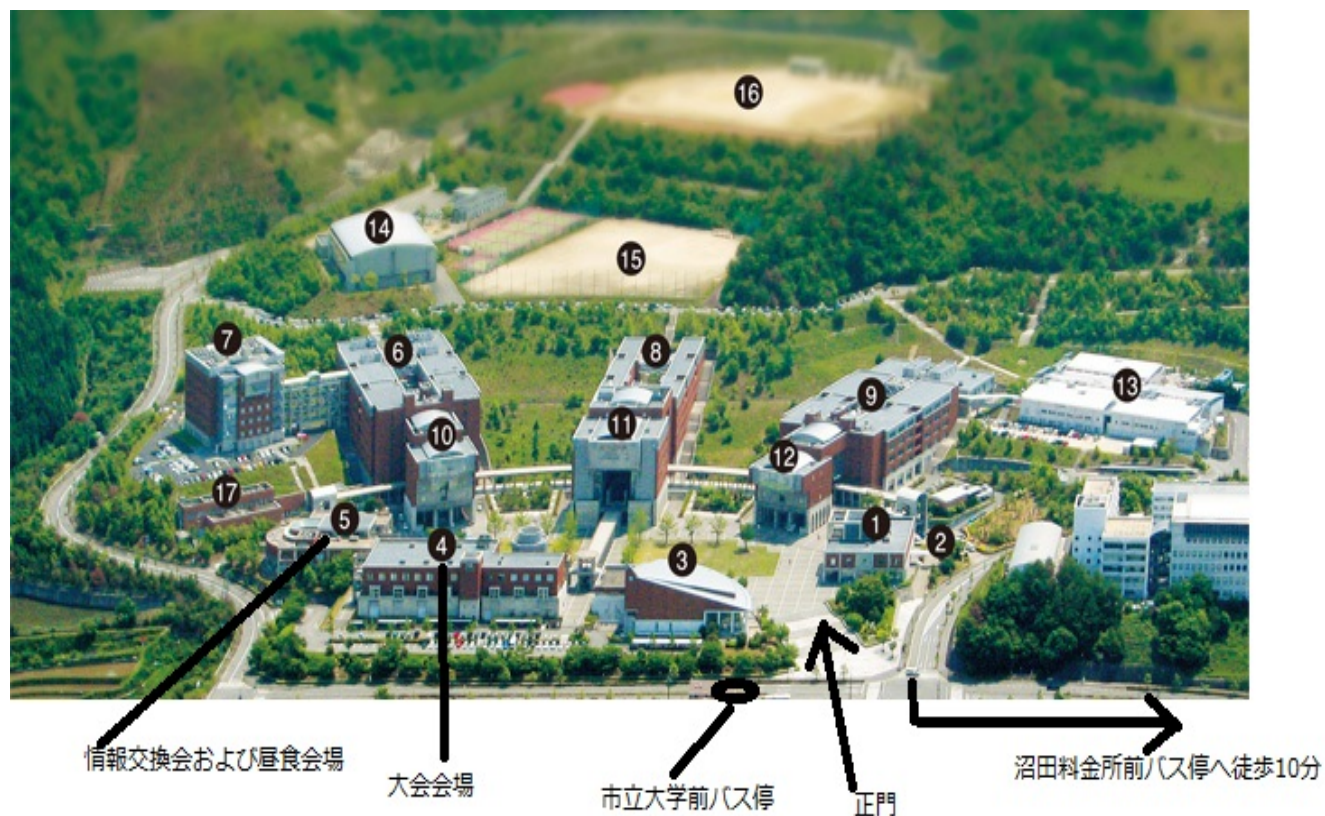
司会・構成	浅井 雅志
	高橋 優季
	松田 誠思
	佐野 哲郎

15:30 閉会の辞

松村 賢一

広島市立大学

キャンパスマップ



- 1.本部棟・国際交流推進センター
- 2.外来者用駐車場
- 3.講堂
- 4.図書館・語学センター棟
- 5.学生会館
- 6.情報科学部棟
- 7.情報科学部棟別館・社会連携センター
・広島平和研究所
- 8.国際学部棟
- 9.芸術学部棟
- 10.情報処理センター
- 11.講義棟
- 12.芸術資料館

日本イエイツ協会

第 49 回大会（於 広島市立大学）

2013 年 10 月 19 日（土）～10 月 20 日（日）

要 旨

<10月19日(土)>

講演 “Supernatural Songs” を読む 藤本 黎時 1

研究発表

「由国の芸術家をさいなむ不安—W. B. イェイツの *The Bounty of Sweden*」
諏訪 友亮 2

「螺旋階段とリフレイン： ‘Stare’s Nest by My Window’ の場合」
佐久間 思帆 3

「イェイツの「歌う」行為と「書く」行為：イースター蜂起と「声によって結ばれた共同体」」
西谷 茉莉子 4

シンポジウム

「イェイツと老い：老いと創作の関わり」 5-8
伊達 直之（司会・構成）、山崎 弘行、木原 誠、長谷川 弘基

<10月20日(日)>

研究発表

「言わない名前：イェイツによるアンチ・ヒロイン像」 中村 麻衣子 9

「イェイツの初期の抒情詩に見られるロマン主義」 橘川 寿子 10

「ジェニファー・ジョンストンの *Two Moons* について」 吉田 文恵 11

ワークショップ

「イェイツ・老い・想像力/創造力—詩の源泉としての<老い>」 12-15
浅井 雅志（司会・構成）、高橋 優季、松田 誠思、佐野 哲郎

<10月19日(土)>

講演 10:30~11:30

“Supernatural Songs”を読む

藤本 黎時

今回のイエイツ協会大会では、「老い」が主題として取り上げられることになった。そこで、齢90歳の老隠者 Ribh の登場する、イエイツの晩年の連作詩篇、“Supernatural Songs” (1935年) をとおして詩人の晩年の詩想、宗教観、世界観などを探ることにした。

曾祖父も、祖父もアイルランド教会の牧師という家系に生まれたイエイツは、キリスト教信者としての節度を心得た日常生活を送ったが、詩人としては、若い頃からキリスト教思想から自由に羽ばたき異端とも言うべき様々な思想に興味をもった。ドゥルイッド教、ヒンズーの神秘思想、占星術、錬金術、プラトニズム、神智学、カバラ、禅仏教等、古今東西のさまざまな思想に耽溺し、遍歴を重ね、それらが詩作の源泉となった。イエイツの宗教観を解明しようとすると、矛盾の谷間に迷い込み、詩人の様々な関心の迷路で道を見失ってしまうだろう。

イエイツは、この連作詩篇の他に何編かの連作詩篇を書いている。これらの連作詩篇を一読するとき、個々の詩の内容やテーマが必ずしも密接につながっているという印象は得られないが、全体としてみれば一貫したテーマを認めることができよう。

しかし、“Supernatural Songs” は、12編の個々の詩の内容に一貫性が見られず、連作詩篇全体を把握することが難しく理解に苦しむ作品である。そこで、仮に全詩篇を老隠者 Ribh の登場するシナリオとして読み、Ribh のモノローグとして解することで、あらためてこの連作詩篇の解釈に挑戦してみることにした。

「夜明けとともに人間の栄光もその記念碑も露と消え果てるのだ」という悟りの境地に到達した老隠者 Ribh は、晩年の詩人の到達を望んだ境地を代弁しているのだろうか。老隠者 Ribh のペルソナを通して詩人が伝えようとしているメッセージ(福音)を読み解きたい。

自由国の芸術家をさいなむ不安 — W・B・イエイツの *The Bounty of Sweden*

諏訪 友亮

1955年版 *Autobiographies* の最後を飾る旅行記 “The Bounty of Sweden” と受賞スピーチ “The Irish Dramatic Movement” は、イエイツが1923年のノーベル賞授賞式から帰ってまもなく書かれ、一冊の本 *The Bounty of Sweden* として1925年に Cuala Press より出版された。スライゴで幼少期を過ごした一介の芸術家から国民的作家へ、ヨーロッパを代表する文学者へと飛躍する過程を記した *Autobiographies* の末尾では、まさにアイルランドの作家が到達する自己実現の一物語が完結していると言っているだろう。それとは別の理由で、巻末の2編が注目に値するのは、これらが唯一、1922年のアイルランド自由国成立を経たイエイツ自身について、近過去を回想する形で書かれていることである。内容と言えば、アイルランドと英国同様に対立をかかえた北欧諸国への雑感、その国々とアイルランドの比較、スウェーデン王家に対する毀誉褒貶。特に繰り返されるのは、王政下にある芸術と芸術家への思索である。そのなかで対照的に見えてくるのは、自治権をえて新たな政治形態へと移行するアイルランドにおいて、イエイツが抱いていた芸術存続への不安ではなかっただろうか。

今発表では、これまで不足してきたイエイツ自伝の研究書、さらにアイルランド文学全体における自伝研究の動向を踏まえながら、まずは *Autobiographies* の最終2章を位置づける。続いて具体的にテキストを読み、そこから浮かび上がってくる、自由国下のイエイツに特徴的な芸術観および政治観の一面を検討したい。

螺旋階段とリフレイン：`Stare's Nest by My Window'の場合

佐久間思帆

塔に籠る詩人の叫びであるリフレインは、まるで螺旋階段のようだ。螺旋階段は、上から平面的に見ると同じところをぐるぐると円を描いているようだが、側面から見ると斜め上または下へと向かう直線となる。実はここで使われているリフレインも、同じ言葉を繰り返しているように聞こえて、実は、繰り返すごとに意味が変化していると考えられるのではないか。

ここで重要な役割を果たすのが“stare”という語。文字通りであれば「ムクドリ」のことだが、“stair” 「階段」と同音であること、すなわち地口であることに注目したいと思う。階段からは当然、螺旋階段が連想される。

本発表では、このような“stare”という語と螺旋階段、そしてリフレインとの関係から`Stare's Nest by My Window'を考察したいと思う。

イエイツの「歌う」行為と「書く」行為：イースター蜂起と「声によって結ばれた共同体」

西谷茉莉子

イエイツは初期の頃から、声を介した芸術の力によって、異なる立場の人々から成るアイルランドをひとつにまとめることができるという信念を持っていた。彼の抱いたアイルランドの青写真は、いわば「声によって結ばれた共同体」であった。彼が、作品中、自らを「歌い手」として描くことが多いのは、そのような信念に基づくものと言える。しかし、1900年代から1910年代前半にかけて、イエイツが直面したのは、ダブリンのカトリック中産階級と協調的な関係を築くことの挫折であった。彼は、「声によって結ばれた共同体」という理想像の撤回を余儀なくされる。

そのような文脈を踏まえた上で、本発表では、1916年のイースター蜂起に焦点を当てたい。蜂起の後、首謀者が英雄化され、沈滞していたナショナリズム運動が一気に加熱し、分裂していたアイルランド世論がひとつにまとめられたことはよく知られている。この時期、イエイツの「声によって結ばれた共同体」に対する考えは、どのように変化したと言えるだろうか。また、どのような形で彼の作品に映し出されているのだろうか。

そのことを考える手がかりとして、本発表では、“Easter, 1916”の74行目における、語り手の「書く」という行為に着目したい。Jahan Ramazaniは、著書 *Yeats and the Poetry of Death* において、詩人が蜂起者達の名前を書き記す行為を、神話化の作用と関連づけている。語り手の「書く」行為に、蜂起という出来事の永遠化を見出す彼の読みは、妥当なものであると言えよう。しかし、この詩の持つ重層性を考慮した時、それがこの作品における唯一の解釈であると結論付けるのは早急であるように、私には思える。本発表では、“Easter, 1916”の解釈を軸に、イエイツの「歌う」行為と「書く」行為の意味を考えたい。

シンポジウム

14:30～17:30

《シンポジウム総合タイトル》

「イエイツと老い：老いと創作との関わり」

構成・司会：伊達直之

「老い」は詩人イエイツがまだ青年であった時期から死に直面した最晩年まで、その作品の重要な主題であり、モチーフであり続けた。既にイエイツ研究の中心主題の一つとして、詩と劇作品に現れる「老い」の表象については、多くの碩学が詳細なテキスト分析を通して、伝記的事実や同時代の政治・文化状況との関わりへの調査と深い洞察に基づいた解釈の可能性を示してきた。

本シンポジウムではイエイツ作品に見られる「老いの表象」ではなく、「老いることと、詩人が創作をすること」との内的な関係に焦点をあて、その上で作品に顕在・潜在する力を再確認するシンポジウムにしたい。「老い」の現れる作品を扱いつつも、表象(あるいはイメージ)として対象化された「老い」についてこれは何かと問うのではなく、詩人が自己の内に老いを意識した認識や実感が、創作の言葉とどのように関わったのか、変化する心身と共になぜ書き続けた(られた)のかを、時にはあえて詩人の内面にも踏み込むことを怖れず、深く語り合うシンポを目指している。

受苦と悲劇的喜びの葛藤

講師：山崎 弘行

本発表では、次のような 3 つの比較作業を行うことにより、イエイツにおける老いと詩作の関わり方を検討したい。

最初に、イエイツの初期の詩 ‘The Wanderings of Oisín’ と、そのソースの一つとして知られる Michael Comyn の詩 ‘The Lay of Oisín in the Land of Youth’ および Lady Gregory が英訳編集した古代アイルランド語詩 ‘The Hag of Beare’ を、老いに対する主人公の態度に的を絞って比較したい。この比較作業は、イエイツがキリスト教的な老年観に挑戦することで独自の文学の創造を目指したことを裏付けるはずである。またキリスト教の老年観への挑戦は青年時代にとどまらず、上院議員時代に書かれた中期の詩 ‘Among School Children’ や、晩年の詩 ‘The Wild Old Wicked Man’ が示すように、生涯に渡り持続したことも論証したい。次に、上掲した各時期の老いの詩をイエイツの代表的な戦争詩と比較する。イエイツはオーエンの戦争詩を自分が編集した *The Oxford Book of Modern Verse* から排除した。その理由として、詩にふさわしいテーマは「悲劇的な喜び」であり、「受苦」ではないという詩学を表明した。この比較作業により、イエイツは戦争詩に限らず、老いを扱った大部分の詩でもほぼ忠実にこの詩学を実践していることを明らかにしたい。最後に、ニーチェの著作に見られる老年観を上掲詩に見られるイエイツのそれと比較したい。受苦と神への絶対的な帰依を忌避する反キリスト教的で異端的なイエイツの老年観は、愛読したニーチェのそれに類似している。本発表では、イエイツが読んだ『喜ばしき知識』に見られるニーチェの老年観と比較しながら、イエイツの老年観の独自性を明らかにしたい。

老いと「仮面」

講師：木原 誠

イエイツを「年を取るごとに若返った詩人」と評したのは、T. S. エリオットである。名言であるが、問題は、なぜこのような不思議な現象が詩人の身に起こったのかである。この点についてエリオットは、老人なら誰でも承知している老いの内面の真実（公然の秘密）を「誠実」に表現する「技術」を詩人が体得したことよるとしている。これまた見事な解釈だが、それではこの「技術」とは具体的には何を意味しているのか。残念ながら、エリオットはその答えを「後の全作品の精密で全面的な研究」に委ねると述べるに留めている。本発表では、エリオットが委ねたこの課題、その手掛りをイエイツ詩学の核心である「仮面（＝逆説）」の詩法に求め、一つの命題を立て、それを検証していきたい。命題は＜「仮面」への誠実さこそ詩人若返りの秘儀である。＞

前期と後期の老いに向かう「仮面」のベクトルは正反対である。すなわち、前期＝青年詩人が被る「仮面」は未来としての老いに向かい、そこから翻って現在を「反復」し、己が若き生を意味づけていく（“When You are Old” 参照）。そこに描かれた老人の姿は、薄明に浮かぶ一つの寂寥の美である。一方、後期＝老詩人が被る「仮面」は過去である若き生に向かい、そこに表現されているのは暁の中で常軌を逸して生に執着する（ときに醜悪なまでの）老人の姿である。ではなぜこのように「仮面」は変貌を遂げたのか。それは、詩人自身の生身の老いに直接関係しているとみる。「仮面」は「反対自我」であるため、青年は老人の、老人は青年の「仮面」を被らなければ＜仮面の誠実さ＞に欠からである。詩と詩人の人生を切り離して考えることができない所以がここにある（エリオットが自らの掲げる「没個性化」を否定してまでイエイツを讃えるのはこの部分である）。

本発表では、上述したことを具体的に確認しながら、最終的に詩人が行き着いた老いの境地、＜人生の成れの果て/生成り般若＞の生き地獄＝「煉獄」の状況を、イエイツの作品全体の底流にある＜巡礼のモチーフ＞とその変貌を手がかりに探していきたい。

イエイツが本当に年老いたとき

講師：長谷川弘基

イエイツがごく若いときから、つまり「少年」あるいは「青年」だったときから「老い」に並々ならぬ関心を示していたことは、例えば *The Wandering of Oisín* (1889) のテーマ設定や登場人物の扱いにも顕著であるし、*Autobiographies* の記述にも明らかである。そして、若きイエイツにとってのヒーローは祖父の Pollexfen であり、IRB 活動家の O' Leary であった。イエイツにとって、「老い」は決して単なる衰弱（衰弱であることを否定はしないが）ではなく、知恵・尊厳・威厳などの、何か不思議にポジティブな性質を伴うべきものと考えられている。そのような感受性・思想を身につけていた詩人が、実際に自ら年老いたときに世に出された詩集が *The Tower* (1928) である。詩人が 63 歳のときのこの詩集は、まさに聳え立つ塔のごとく、イエイツにとっても最も輝かしい作品の一つであろう。そして、その主題の一つが「老い」であることは冒頭の二つの詩を読むだけで容易に理解できる。“The Tower” の第三部冒頭に “It is time that I wrote my will;” とあるように、それは詩人の文学的遺言であったとさえ考えられる。

しかし、詩人イエイツには生きる時間がまだ 10 年余り残されていた。その間にはマルタ熱によって死線をさまよう体験も、あるいはシュタイナッハ手術の経験も含まれている。仮にこの最後の 10 年をイエイツの晩年と見なした場合、「晩年のイエイツには何か重要な変化が認められるのだろうか？」という、素朴な疑問が浮かび上がる。さらに言えば、「人は晩年になってもなお（積極的に）変化することができるのだろうか？」という、希望にも似た好奇心が刺激される。

この好奇心に刺激され、イエイツが最晩年に残した “The Circus Animals' Desertion”、“Politics”、“The Man and the Echo”、“The Black Tower” などの一連の作品を読み直すとき、「老い」というペルソナを通して、聞き慣れない声が幽かに聞こえてくるように思われる。この聞き慣れない声の正体とその意義について可能な限り探りたいと考えている。

<10月20日(日)>

10:30~12:00

研究発表1

言わない名前：イエイツによるアンチ・ヒロイン像

中村麻衣子

イエイツの詩「復活祭 1916年」において、復活祭蜂起の指導者たちはその名前を謳われ、その存在を永久のものとされた。同時に、メディアやその後の歴史によって彼らの存在はアイルランド建国の英雄ともなった。その一方で「復活祭 1916年」をはじめとするイエイツの詩の中にその存在が取り上げられながらも、その名前を消され、英雄化もなされなかったのがコンスタンツ・マルキエビッチである。蜂起の後、混迷するアイルランド政治情勢に一定の距離を保ちながらも、作品の中に時事的、政治的な問題に関わる実在の人物の名前を取り込み、詩というフィクションを媒介として彼らの英雄化を図るという、現実的な側面を見せていたイエイツが、なぜ個人的にも知己であった彼女のことを英雄化することがなかったのだろうか。

本発表ではイエイツがマルキエビッチを取り上げた作品を中心的に分析すると共に、復活祭蜂起以降のイエイツ作品においてたびたび描かれた政治、とりわけ独立問題に関わる人物たちの英雄としてのイメージと、マルキエビッチの表象がいかに関わり合い、食い違うかということ論じる。イエイツが英雄化を図った蜂起の指導者やパネールなどは、詩の中でその私的な側面を描かれることを通じて英雄へと転換されているが、同じように私的側面を描かれながらも、彼らと異なり英雄に転換されることがなかったマルキエビッチ像について比較検討し、イエイツにとっての女性、ヒロイン像がどのようなものであったかという点についても考察する。

研究発表 2

イエイツの初期の抒情詩に見られるロマン主義

橘川寿子

19 世紀末から 20 世紀にかけて活動したイエイツの初期の抒情詩に表れるロマン主義は、彼の詩作の原点であり、中期、後期の作品を通じて、その根底に流れている。心の奥底から湧き起こる強い感情が詩作の衝動となる広義のロマン主義は、力強いモダニスト、イエイツの言葉の中にも見られる。本研究発表では、*The Rose* (1893) 所収の二篇の短詩、“The Lake Isle of Innisfree” (1888 年制作、1890 年発表) と “When You Are Old” (1891 年制作、1892 年発表) を取りあげ、前者については、その大衆性と文学性、代表的初期作品として最も知られている、この詩のリズムや形式、「個」と「自然」のテーマなどを考察し、数年後に書かれた後者については、16 世紀ルネサンス期のフランスの詩人、ピエール・ド・ロンサールの宮廷風恋愛詩である一篇のソネットから着想を得て、19 世紀末のアイルランドの詩人であるイエイツが生み出した、元の詩とは全く異なる 12 行詩の愛の歌の中に表れるものを考察する。ソネット形式の生まれた頃である 13 世紀、14 世紀などの作品についても考え合わせながら、mutability の捉え方や表現方法を比較し、ロマン主義の特性の一つである、無限性、永遠性に対する憧憬の念がイエイツの詩に表れている事に注目する。また 1892 年の 12 行詩、“When You Are Sad” や中期作品である彼の初めての 14 行詩 “In the Seven Woods” (1902 年) にも触れ、彼の表現のスタイルがさらに変わっていく点を見たい。そこにはイエイツ自身の言葉である “insight and knowledge” の詩を目指し、象徴主義に向かおうとするイエイツの姿がある。1888 年から約 5 年の間に、モード・ゴンとの出会いやアイルランド復権運動との関わりの中にあって、詩への情熱を傾け、より大きな詩人へと脱皮し、自己生成するイエイツの姿を探りたい。

研究発表 3

ジェニファー・ジョンストンの *Two Moons*

吉田文美

Two Moons (1998年) は、ジェニファー・ジョンストンの第11作目の小説である。この作品以前のジョンストンには、アイルランドのプロテスタントとカソリックの対立を背景にした個人の葛藤を描く作家という印象が強い。たとえば *How Many Miles to Babylon?* (1974年) では、アイルランドのプロテスタント地主階級出身の主人公とカソリックの小作農の少年の間に生まれた友情の悲劇的な末路を描き、また *Shadows on Our Skin* (1977年) では北アイルランド紛争を背景にして、年上の女性に恋をする少年の葛藤を描いている。しかし、*Two Moons* では、アイルランドの宗教的あるいは社会的な問題はさほど強調されていない。そのうえ、作中で「天使」だと名乗る人物も登場する異色作である。

しかし、*Two Moons* の2年後に出た *The Gingerbread Woman* では、ジョンストンは元の路線に戻ったかのように見えた。爆弾テロで家族を失った北アイルランド出身の男性と、不幸な恋愛で心身ともに傷を負った南アイルランド出身の女性を対照的に描いたものであったからだ。そのため、*The Gingerbread Woman* が発表された時点では、ジョンストンという作家が目指している方向が今ひとつ見えにくく、*Two Moons* についての断定的な評価を下すことはためらわれた。しかし、*Two Moons* の出版以降、10年以上が経過し、*The Gingerbread Woman* に加えて5つの作品が出版された現在は、*Two Moons* という作品の意味を検討することが可能なように思われる。

この発表では、*Two Moons* という作品を紹介すると同時に、他のジェニファー・ジョンストンの作品と比較しながら、*Two Moons* という作品について再考してみたい。

「イエイツ・老い・想像力／創造力—詩の源泉としての老い」

司会・構成 浅井雅志

イエイツがその詩的創造力の頂点を迎えるのは、多くの詩人の場合、その枯渇が感じられはじめる時期、すなわち〈老い〉を自覚するようになる時期以降である。これは単に、西洋の長い詩的伝統において（ゲーテなどと並んで）稀有だと いうだけでなく、人間の生理と芸術的創造力との間の内的連関性を考察する上で またとない材料を提供してくれる。しかしその一方でイエイツは、〈若さ〉とそれが保証する性的能力と詩的創造力の間には密接な関係があるとも感じていた ようで、それがシュタイナッハ手術を受けるという毀誉褒貶相半ばする行動につながっているようだ。このワークショップは、特定の詩を複数の発表者がさまざまな角度から論じるという通常のそれとは異なるものとなるが、イエイツの〈老い〉および死についての想念、およびそれとの格闘が、彼の詩作／思索においていかなる役割を果たしたのかを、異なる年齢層に属する発表者が、独自の角度から切り込むことで、一種の交響曲のような広がりとも共鳴（あるいは不協和音？）を示したいと考えている。

最初に浅井が、イントロダクションとして、イエイツの〈老い〉と〈若さ〉についての想念を、D・H・ロレンスや三島由紀夫と比較しながら述べたい。その後、三人の発表者から、以下の順序で話していただき、それに続くフロアとの議論への土台としたい。

Thoor Ballylee から Honan Chapel へ、老詩人の旅立ち

高橋 優季

W.B. Yeats が中心的役割を果たしたケルト文芸復興とほぼ同時期、1890 年代後半のアイランドには、生活の実利性と芸術美の調和を目指したアーツ・アンド・クラフツ運動が英国から伝播した。かつてアイランド人が持っていた芸術の偉大さをその伝統と共に現代生活の中に蘇らせようとする点で、二つの文化的運動は同じ精神を共有し、イエイツはその両方に深く関わったという事実がありながら、彼の詩作品がアーツ・アンド・クラフツ運動との関連から研究されることは、決して多くはない。

一方、1917 年に W.B. Yeats が住処として購入したゴールウェイの Thoor Ballylee の修復を務めた William A. Scott によるアーツ・アンド・クラフツ運動の代表的建築物、ヨークの Honan Chapel 内部の装飾美術と、イエイツのビザンティウム詩との関係を指摘する見方もある。

イエイツがその実際を見ないまま、詩や散文に幾度となく描いたビザンティウムの審美的なイメージは、彼の実体験や先達から受けた思想的影響、視覚芸術との関わりなど様々な観点から論じられてきた、興味の尽きないテーマである。そして、古代ケルト装飾がビザンティン芸術に結びつく可能性が、アーツ・アンド・クラフツ運動のなかで継承されようとしたこともイエイツは熟知していた。

この発表では、アイランドのアーツ・アンド・クラフツ運動を背景に、“To be Carved on a Stone at Thoor Ballylee” から “Sailing to Byzantium” への流れを、年老いた詩人としてのイエイツの旅立ちとみた場合、前者に刻まれ予感される老いと死への意識に、彼がどう後者のなかで対峙し克服しようとしたかを探ってみたい。その旅先、永遠不変を表す黄金の鳥となり「過ぎ去り、今過ぎ行き、これから過ぎようとする」時の流れを歌う詩人の姿を Honan Chapel に見つけられるのならば、老詩人の旅路とアーツ・アンド・クラフツ運動は決して無関係ではなく、ある意味で自国への帰還として成立するのかもしれない。

“That old perplexity an empty purse,
Or the day’s vanity, the night’s remorse” (“The Choice”)

松田誠思

イエイツが少・青年期から、〈時間〉のもたらす変化にたいしてきわめて敏感に反応し、それが一貫して詩の重要な主題となっているのは周知の通りであるが、彼が〈老い〉を強く意識するようになったのは、六十歳前後かと思われる。これは生命の衰えだけでなく、個我の確実な消滅への予感と徴候をともなう点で、〈時間〉のもたらすさまざまな変化の中で特異な意味合いを持っている。人間が生きつづけるかぎり、〈老い〉は誰も避けることのできない生理的・心理的・社会的現象であるということのほか、彼の場合は詩人・劇作家としてこれにどう対処し、主題としてどのようにとらえ、どのように表象するかが、いわば「臨床的」な課題となった。

イエイツ詩における〈老い〉の主題は、おおむね四つに分類できよう。1) 生成と消滅を繰り返す自然の中であって、心身のエネルギーの衰えを乗り越え、不変の価値を実現する新たな芸術的方法の探求。2) 生を肯定するエロスへの強い執着と、それに対応すべく性的能力を強化し、詩的創造力の再活性化を図ること。3) 〈老い〉の生の充実にたいする意欲をそぐような、これまでの自己の生についての悔恨 (remorse)、徒労感・無意味感など。4) 迫りくる死の神秘への恐れと、これを受け入れる勇気。死後生についての確信と、その不可知の真相を凝視すること。

イエイツの〈老い〉にたいする意識と行動は、矛盾撞着を含みつつ驚くべき広がりや深みをもっている。ここでは、上記 2)、3)、4) にわたる詩群の中から ‘The Wild Old Wicked Man’ (1938) と ‘The Man and the Echo’ (1939) を取り上げ、ヤヌスのごとき老詩人の風貌を示す。特に〈老い〉を表象する作詩法 (韻律・詩形と主題、リフレインの多義性、不完全対話・瞑想の中断の語法) などの問題点を指摘して、ワークショップの討論材料とする。

年がいしミューズと若きミューズ

佐野 哲郎

イエイツは、ノーベル賞を受けた翌年に発表した“*The Bounty of Sweden*” (1924)で、こう言っている。「私も、かつてはこのメダルに刻まれた若者のように、いい顔をしていた。しかし、私の未熟な詩は、まったく弱々しいものだった。いわば、私のミューズは老いていたのだ。今は、私は年を取って、リューマチに悩み、見る影もないが、私のミューズは、若いのだ。」

この若いミューズの現れが、“*An Acre of Grass*”であり、“*Grant me an old man’s frenzy*”という1行に、それは凝縮している。しかし、イエイツの眼は、ある方向を凝視しながら、常に、反対の方向をも見据えている。その例が、この詩の直後に置かれた“*What Then?*”という詩である。これは、“*An Acre of Grass*”より先に発表されたのだが、全集では、その直後に置かれるようになったところに、イエイツの真髓を見るのである。

メ モ